次代を見据えた確かな技術

フエニックス・コンタクト

フエニックス・コンタクトの年に一度の大舞台が、ドイツ・ハノーバー市で開かれる産業見本市「ハノーバー・メッセ」だ。毎年、数千に上る新製品を最大規模のブースで展示し、存在感をアピールしている。今年は複数の製品を組み合わせたソリューションを中心に展開。またエネルギーやeモビリティーといった次世代産業に注力する姿勢を打ち出した。ブースには各国の来場者が続々と集まり終始にぎわいをみせ、同社の技術開発に対する期待の高さを表した。

ハノーバー・メッセの会場から

再生可能エネルギー関連のソリューションを前面に

4月4―8日に開かれた「ハノーバー・メッセ2011」で、フエニックス・コンタクトは2000以上の新製品と30の新技術を披露した。ハイライト製品として継続的なバッテリー監視を行う「インテリジェント無停電電源装置（UPS）システム」や超小型産業用パソコン、風力発電システムを雷から保護する装置などを提案。メーンブースでは再生可能エネルギー関連のソリューションを大々的に展示し、従来の接続技術だけにとらわれず、今後成長が見込まれる分野で幅広く展開できる点を強調した。

「フエニックス・コンタクトにとってハノーバー・メッセはグローバルレベルで最大の展示会」。コーポレートセールスネットワークマネジメント・オーヴァーシーズディレクターのラルフ・マスマン氏は、出展に当たりこう意気込んだ。今年のハノーバー・メッセは65カ国から6500社が参加、22万―23万人が来場したと見られ、過去10年で最大の規模となった。同社のメーンブースは延べ床面積2200平方㍍の3階建て。1階に製品を展示、2階に会議室、3階にレストランを備え最大級の規模を誇る。同社はメーンブースを含めて計8ブースを出展。各ブースでテーマに沿った製品を展開した。

メーンブースでは工業用エレクトロニクス製品やデバイス接続技術を展示。中でもブース前面部に水処理や電気自動車（EV）の充電システム、太陽光発電やスマートグリッドなど再生可能エネルギー分野のソリューションを置き、姿勢をアピールした。日本の来場者からもエネルギー関連の展示に熱い視線が注がれ、特に風力発電システムやエネルギーデータの記録計などが注目された。風力発電については専門のブースで制御システムや接続技術、サージ保護装置を展示し、システムをトータルでカバーできる製品群の広さを見せつけた。

またモビリテックという展示分野で、EVの接続ソリューションや充電コネクターに関する専門ブースを設けた。同社は欧州で充電コネクターの接続方式の標準化を進めており、米国や中国でも同様に取り組んでいる。ブースでは関連技術を結集し、そのリーダー的な立場をアピールした。

出展社中、最大規模を誇ったフエニックス・コンタクトのブース

ハノーバー・メッセ会場は新技術に関心が集まった

新たなビジネスモデル発信

INTERVIEW

今後のフエニックス・コンタクトの展開について、エグゼクティブ・バイスプレジデント・マーケティング&ディベロップメント・メンバー・オブ・ザ・ボードのローランド・ベント氏に聞いた。

＊

―日本市場にどうアプローチしますか。

「日本は重要な市場だととらえている。ヨーロッパにおけるフエニックス・コンタクトのような立ち位置を日本でも確立したい。小型端子台の『コンビコン』で地位を確立できた手応えがあり、次の段階として『産業用端子台』、『インターフェース』、『オートメーション』の関連製品を展開する。また日本はハイテクの国だ。日本顧客のニーズを聞いて開発した高速・ロバスト・簡単配線の特徴を持つI／Oモジュールの『アクシオライン』やプッシュイン技術の端子台『PIT』のように、地域に密着したニーズを取り入れた製品を作っていきたい」

―日本ユーザーの要求は厳しいですか。

「厳しいとは思わないが、違うと感じている。例えば日本の工作機械のオペレーターは技術力が高く、安全性に対する要求が欧米などとは異なる。日本のユーザーのおかげで品質が上がっていることは確かだ」

―これから注力していく技術分野は。

「インターネットやブルートゥースなどを使い、工業市場で情報をどう展開するかが重要だ。自動車などの大規模産業では工場と経営側の情報の一元化が求められている。当社はいち早くインターバスを開発しそのニーズに応えてきたが、近年欧州ではイーサネットベースのバス化が急速に進んでいる。インターバスでの経験と実績をもとに、イーサネットベースのネットワークの拡大や情報の展開方法など、我々が『ITパワー』と呼ぶ分野でソリューションを提供できる」

―今後の計画は。

「5―10年で25億㌦以上の売上高を目指したい。そのため製品単独ではなく、複数を組み合わせたソリューションビジネスを進める。中でも再生可能エネルギー分野や、電気自動車（EV）の充電システムに象徴されるようなインフラ分野に注力する。加えてコントローラーやオートメーション、風力発電の分野をさらに拡大したい。風力はトータルシステムを提供できる体制がある。とはいえ当社は接続機器の会社だ。センサーやアクチュエーターなどの間をつなぐ役割のメーカーであることを自覚しながら、豊富な製品を提供できる企業でありたい」

「また営業部隊を強化している。例えば米国には100人を超す技術者がおり、案件はドイツを介さずその国で解決する。迅速な対応が可能だ。ゆくゆくは日本を含めほとんどの国でこの体制を整えたい」

エグゼクティブ・バイスプレジデント・マーケティング&ディベロップメント・メンバー・オブ・ザ・ボード
ローランド・ベント氏

風力発電分野 さらに拡大

フエニックスコンタクトグループにとって日本は世界で最も重要な市場の一つ。一方でライバル企業もひしめく激戦区でもある。日本法人を率いる青木良行社長に国内戦略を聞いた。

＊

―フエニックス・コンタクトグループにとってハノーバー・メッセはどうのように位置づけていますか。

「グループの技術とイノベーションをお客さまに示す最大の機会ととらえています。毎年、何十種類もの新製品を発表し、活発な商談が行われている。強いメッセージを発することができる場でもあります」

―単にPRするだけでなく、お客さまとのコミュニケーションをとることができます。

「フエニックスグループが最新の技術を紹介するだけにとどまることなく、お客さまに役立つ製品・技術であることをアピールしました。今回の目玉は電気自動車の充電システムや風力発電、水処理制御などで使用いただける新製品です。幅広い分野のあらゆるフェーズでコネクターや電源などの当社製品が役立つことを見て頂くことができました」

―今回も日本のお客さまとハノーバーを訪れました。

「昨年はアイスランドの噴火、一昨年はリーマンショックで日本のお客さまを御案内できなかった。日本のお客さまと展示会にきたのは2008年以来。今年はドイツが好況の中で、お客さまに展示会をお見せできました。工場も見てもらい、フエニックスのモノづくりの現場を見てもらうこともできました」

―お客さまにモノづくりの現場を見てもらうことは、信頼につながります。

「日本法人としてサービス、納期、品質対応を充実することが最も重要なことと考えています。そうすることでドイツが本拠地の企業ではありますが、日本に根付いていくことができます。モノづくりの現場を見てもらうことはフエニックスを身近な企業と感じてもらえるチャンスでもあります」

―3月の東北関東大震災ではフエニックスグループの取引先やお客さまも震災にあいました。

「フエニックスグループにとって日本は関心の高いマーケット。ドイツのボードメンバーからも多くのお悔やみのメッセージが届けられました。ドイツ本社は国際赤十字に義援金を出し、米国法人は4月いっぱい、募金活動を行っています」

「我々日本法人も義援金をはじめ、できるだけのことをしています。当事者意識をもって復興に協力したと考えています。復興を目指す産業界の皆さまに今まで以上に緊密にコンタクトさせて頂き、ご要求を確認し、早く製品を届ける体制を築いています。日本人だからこそ復興できると信じています」

フエニックスコンタクト日本法人社長
青木　良行氏

サービス、納期、品質を最重要視

事業概要

革新的なソリューションを提供

「我々のミッションは革新的なソリューションを提供して進歩すること。このままとどまることなく魅力的な製品を発信する」。リージョナルマネージャーアジアパシフィックのフランク・アッカーマン氏は訪れた日本の顧客に対し、こうメッセージを発信した。ドイツ・ブロンベルク市に本社を構えるフエニックス・コンタクトは1923年に設立し、接続技術の企業として発展してきた。

同社は世界12カ所の生産拠点と46カ国に現地法人を有し、計1万1000人以上の従業員を抱える。

日本法人は1987年にアジアで最初の販売子会社として設立された。1月には東京支店を新設した。これで日本国内の拠点は7カ所となり、より地域に密着した展開が可能となった。

日本へは今夏をめどに新製品を順次投入する。最大電線径1・5㍉に対応する端子台幅が3・5㍉の省スペースのプッシュイン式端子台「PIT1・5／Sシリーズ」や、防水規格IP67に対応した防じん・防水機能を備えたアンマネージドスイッチ「FL SWITCH1605 M12」、イーサネット経由で雷監視できる雷電流モニタリングシステム「ライトニング・モニタリング・システム」などを発売する予定だ。

新製品投入で風力発電や工作機械、ビルオートメーションなどへ守備範囲を拡大し、さらなる成長を図る。

東日本大震災の被災地の皆様に心よりお見舞い申し上げます